研究ノート

歴史には、国家盛衰の因果律が現れる

永安　幸正

目　次

(一)　国家改革の歴史から学ぶ後知恵
(二)　国家の統合改革は、霊力を開発し配分するにあり
(三)　日本における天皇の意味はいずこにありや
(四)　政治と国民が霊力を活かす
(五)　歴史の因果と禍福はメビウスの輪のごとし

キーワード：国家改革の歴史、霊力、建武の中興、天皇の意味、歴史の因果

(一)　国家改革の歴史から学ぶ後知恵

幸いにも、われわれは「奢(おご)れる人(ひと)も久(ひさ)しからず」と教わっている。「積小為大(せきしょういだい)」――小さい努力を積み重ねてやがて大きな結果を為(な)す――とか、「継続(けいぞく)は力なり」とも教わる。しかし、「長者(ちょうじゃ)三代続かず」とも警

告されるが、これもどうやら真理のようだ。

中国の古典では、

「積善の家には余慶あり、積不善の家には余殃あり」

といわれる。この家というのは、家族つまり生活と生産の共同体だと理解すればよい。「途中困難最後必勝」ともいう。

また、「瓜の蔓に茄子は成らぬ」「鳶が鷹を産んだ」などと、生物の遺伝に引っかけて人間の数奇な運命を言い表す。

キリスト教などでは、「富める者が天国に入るのは、駱駝が針の穴を通るより難しい」とも脅かされる。厳しいものである。

国家も人民も、やはりこうした栄枯盛衰という因果の法則を免れないのだろうか。

長い間、内戦や侵略や低開発の状態に苦しんだ中国の人々は、今二十一世紀を迎えて「旭日昇天」(the rising Sun) ともいうべく、勢いづいている。片や、日本はかつて振りかざしていた「世界第二の経済大国」という旗を降ろし、他に譲らなければならないのかもしれない。一方、インドはIT革命は起こっているが、今尚「貧困の大地」である。アフリカでは、至るところ、夥しい人々が、内紛に明け暮れ、飢餓に喘いでいる。

歴史においては、因果律思考は付き物である。原因があって結果が出る——加えて縁も作用する——という見方がある。それは、われわれが、原因と結果との関係で出来事を理解し、事態と運命を改善しようとするときの発想であり、願いである。

ただし、われわれは、因果律に囚われてはならない。個人としても、集団としても、組織としても、国家としても、因果律は決して軽視せず重視すべきである。しかし、囚われると、ろくなことがないのである。過去に囚われると未来を失う。その点で、歴史とは、賢明な因果律思考を学ぶ学校である。

私は学問を自然科学たる「農学」(agronomy) から出発した。稲や野菜などの植物でも、同じ品種を栽培し続けていると、遺伝的な素質が低下（劣化）することがあるので、時々、改良が必要となる、と教わった。自然界は「無常」である。一切は変化し続けている。遺伝子といえども変異する。

農業試験場には——今日では種苗会社などにも——純粋な「原種」というものが保存してあって、事ある毎に遺伝子の回復が出来るようにしてある。文化まで含めて見ると、人間界にもその必要がありはしないか。

個人のいのちでも、集団のいのちでも、時々疲労するので、改革が必要となる。癒しとかドッグ入りのようなものである。だから、歴史から学ぶ中では、国家改革というものを調べることが、現代のわれわれにとって不可欠である。先人たちは、集団のいのちをどのようにして新生させようとしたのか、その功罪を明らかにすることが有益なのである。

日本列島上の国家の歴史をふりかえってみると、次のような国家改革が行われたことが分かる。

①奈良時代から平安時代にかけて、「大化の改新」（六四五）と「律令体制」の構築
　隋を意識した聖徳太子の改革を先駆けとして、その後の唐制にならった。
②鎌倉幕府体制の開始（一一九二、イイクニツクロウ、と覚えたもの）
③建武の中興の混乱から室町幕府への移行（一三三六）
④応仁の乱から戦国時代の過渡期を経て江戸幕藩体制の構築（一六〇三）
⑤明治維新による近代国家造り（一八六七）
⑥大東亜戦争の敗戦とマッカーサーによる日本改造（一九四五）

歴史上、日本の国家改革は、概ね成功の連続であったが、このうち建武の中興（新政）とはいうものの、明らかに失敗であったといわれる。そして、マッカーサー改革は、後に述べるように、日本人ではない外来外国人による占領下の改造であって、その衝撃はPTSDとなり、われわれの心の中に未だに尾を引いている。

さて、祖国が栄えるか亡ぶかについて、われわれは無関心では居れない。そこで、人は、他民族の文とはいえ、次のような箇所を読むとき、どのような気分に駆られるであろうか。

悪きものの謀略にあゆまず　つみびとの途にたゝず　嘲るものの座にすわらぬ者はさいわひなり
かゝる人はエホバの法をよろこびて日も夜もこれを思ふ　かかる人は水流のほとりうゑし樹の期にいたり て實をむすび　葉もまた凋まざるごとく　そのなすところ皆さかえん
あしき人はしからず　風のふきさる粃糠のごとし　然ばあしきものは審判に　たえず罪人は義きもの の會にたつことをえざるなり　そはエホバはたゞしきものの途を　しりたまふ　されど悪きものの途 はほろびん……
われに求めよ　さらば汝にもろもろの国を嗣業としてあたへ地の極をなんぢの有としてあたへん　汝 くろがねの杖もて彼等をうちやぶり陶工のうつはもののごとくに打碎かんと

（『舊新訳聖書』日本聖書協会、詩篇第一、二。漢字、ルビ追加。）

ここに「つみびと」とは、エホバの言葉を聞き入れない諸々の国人たち（異邦人）である。われわれ浅ましくも弱き人類は、このような箇所に行き当たって、相反する二つの心情を抱くのではないか。

一方は、「よし、われらが契約を交わせし唯一の神は、その心に沿ってわれらが歩むならば、豊かな大地をわれらに与えたもう」と、元気を出すことであろう。

だが、ややもすれば、大地を約束されるというところにだけ力点を置いて、肝腎の神の法の実行を忘れ、その地を武力で征服することが神に許された行為であると、勝手に思い込むところまで心が走ってしまうのではないか。そうなると、心は帝国主義者の野心となり、かえって神に滅ぼされよう。

他方、これを読んで、次のように控え目に希望する立場もある。

「なるほどそうであるか。ならば、われわれは、心を清め、我欲を拭い、神仏の心に沿って努め、謙虚に生活しよう。神は何時か、大地の何処かにわれわれに相応しい住所を恵んでくださるに違いない」と。

同じ言葉を聞いても、まったく相反する方向へと受け取る可能性が、われわれにはある。どちらが弥栄への道であり、どちらが滅亡への道なのか。

このように、何をどうすればどうなるか、という因果の法則についての関心が、歴史を学ぶときの主題となる。

右は今日の中東を舞台とした古代の歴史哲学であるが、少し西の方に目を向けてみよう。そこには古代ローマ帝国がある。その地の歴史を、われわれは、「ルビコン川を渡る」という言葉の由来となったカエサル（ジュリアス・シーザー）の名とともに学び、記憶している。

その帝国は、「ローマは一日にして成らず」というように、まことに小さな国から徐々に成長した。そして、異民族を支配するまでに拡大して大帝国になると、道路と水道と駅伝（通信）に象徴される高度な土木技術、軍事技術、万民法、経済、郵便の制度、及び後に皇帝自身が信仰していわば帝国の国教とされたキリスト教――バチカン国はその後継者――こういったものがバランスよく組合わされていった。

しかしそのローマも、やがて滅ぶ。それは、一体なにゆえにであるか。これは有名なギボンの『ローマ帝国衰亡史』における主題である。

古代ローマをテーマとする作家の塩野七生さんは、次のように問いを立てておられる。（『ローマは一日にして成らず』新潮文庫、上巻、二〇～二一ページ、ルビ追加。）

知力では、ギリシア人に劣り、
体力では、ケルト（ガリア）やゲルマンの人々に劣り、
技術力では、エルトリア人に劣り、
経済力では、カルタゴに劣るのが、
自分たちローマ人である。少なくない資料が示すように、ローマ人自らが認めていた。
それなのに、なぜローマ人だけが、あれほどの大をなすことができたのか。一大文明圏を築きあげ、それを長期にわたって維持することができたのか。

現代日本のわれわれにとっては、同じような問いが、お隣の東アジア大陸に栄華を誇った大唐帝国（六一八～九〇七）についても立てられる。唐が、わが国の文物にいかに多大な影響を与えたか。まったくわれわれは、言い表す言葉を知らない。

すべてのいのちについて、個人でも、会社や学校など団体組織でも、さらには国家でも、その栄枯盛衰というものが、われわれには気にかかる。すべからく、「いのちは永続したい」からであろうか。いかにすれば、いのちは永続発展できるのか。ローマ帝国は、なにゆえ発展し、持続し、そして滅亡したのか。唐帝国

は、そして現代のわが祖国日本は……。

ところが、現実は亡んでも、理念は永続する。そのローマ帝国は、今、理念として、過去の記憶から現実の世界へと、蘇りつつあるといえる。ヨーロッパ経済共同体（EEC）から出発し、政治統合までも視野に入れる現代のヨーロッパ連合（EU）を建設しようという運動において、そもそもの出発点として想起された帝国、それがローマ帝国だからである。

地球上の人類の歴史というものは、過去のすべての要素を永遠に忘れ去るというような歴史ではないようだ。あらゆる要素を保存し、掘り起こし、繰り返し再構築する、蘇らせる。すなわち復古と維新、温故知新というものが行われるようである。

では、蘇り新生するものとは何であろうか。

さて、われわれは、真に歴史から学ぶには、問いを立てる上でのタブーを取り払うことが先決である。特に、国家改革というようなスケールの大きい事件については、タブーに囚われず根本的、科学的に検討することが有益である。

例えば、**後醍醐天皇**（一二八八～一三三九）の「**建武の中興**」はうまく行かなかったのに、一九四五年までの戦前には、その失敗について原因を解明することなど、もっての外のタブーであった。後醍醐天皇は正統とされる南朝の天皇であったからか。しかし、今日、かの中興の功罪の検討は、現代におけるわれわれの国家改革の在り方に対しても、有益な教訓を与える。

従来、明治からの正統の「国史」（日本史）では、南朝を正統とするというのが通説であり、それによると建武の企ての失敗は、ひとえに悪人・足利高氏（尊氏、一三〇五～五八）の不忠にある、というのであった。

かつて人々に最も広く流布していた解説の一つ、平泉澄博士（元東大教授、一八九五～一九八四）による説明を繙いてみよう。

平泉博士は、いわゆる皇室中心の日本史を熱烈に説き、昭和初年に絶大な影響力を発揮された方であった。

> 高氏は、忠義のために行動したのではありません。足利の重臣今川貞世の書いたものによりますと、高氏の祖父家時は、天下を取ろうと希望したが、まだその時期がこなかったので、自分の命を縮めて三代のうちに天下を取らせてくださいと祈って自殺したのです。してみると足利の家では、代々天下の武権を取ろうという野心をもっていて、それを高氏の代に、鎌倉の勢力衰えてきたのを見て、寝返りうって官軍に加わったのです。（中略）
>
> 彼は京都において、自分勝手に奉行所を開き、全国各地と連絡を取り、武士の動きを登録し、その元締めであり、指揮者であり、実際上鎌倉幕府に代わる者であるかのような印象を与えたのでした。

（『物語日本史』講談社学術文庫、中巻、二〇二ページ、ルビ追加）

それぞれの時代の国家体制は、大きな家――家とは一族と郎党を含む氏族集団――の建物のようなものである。国家すなわち「国という家」は、いのち集団の容れ物である。

すべての国家は、国民のいのちを防衛し、ルールを作り、住む場所を与え、その衣食住を支え、心のやすらぎを与える。その限りでは、家は家として、どんな時代にも基本的に同じ仕組みを持たねばならない。建物としてなら、玄関、居間、台所、床の間、神棚や仏壇……である。

そして、家には、それぞれの時代の必要に応じて、増改築が必要になる。国家体制のイノベーションである。

建武に至る以前の歴史では、奈良時代――広い意味でおよそ古代から平安遷都の七九四年まで――そして平安時代は、大和政権からすればフロンティア開拓の時代であったが、関東や東北の先住民にとっては、征服され、統合される、あるいは「まつろふ」という時代であった。古語に「まつろふ」というのは、支配や保護に服し順うことである。歴史は武力による一方的な征服ばかりではなかった。

この開拓時代には、土地を開墾すれば開墾した人のものになる、という「墾田私有」の制度が確立されて行った。

大和国家の形成においては、先にも触れたように、大和朝廷による東北地方の統合が難関であった。「順はぬ人ども」（化外の民）が大和政権による国郡制への編入にいかに抵抗し、抗争が激しかったかは、前に

引いた、秋田県『山内村史』上巻（九五ページ以下）、岩手県『遠野市史』第一巻（五五ページ以下）に詳しい。また、その頃の坂上田村麻呂の活動に関する伝承も詳らかである。

大和の律令制国家の圧倒的優勢は、政治や年貢のみでなく、恐らく文化の面でも現れ、結局人々の帰順という歴史の流れを生んだわけであった。それがエミシを「化外の民」とし、征討するという悲劇を伴うものであったことは否めない。

この場合、大和朝廷が「荒ぶる神を平定すること」がどのようにして行われたかについては、単に戦によるのみであったかというと、そうではなかろう。

平定は根本において、「荒ぶる神を言向け和す」という方法によったのである。では、言向け和すとはどういうことか。それは各民族が、「皇室へ血縁的に結びつくといふ固有な仕方に於いて統合せられる」ことによってであり、結果、すべての氏族が「おのおの所を得て――皇室といふ唯一の中心へ、血縁的に結びつけられている」という国家社会が考えられたのである。

これは一つの観念であるが、人類社会においては、そういう観念が大切なのである。イスラム社会では、人類はアダムとイヴに始まる血縁の社会であるという観念が存在するが、そのような観念がイスラム社会を形成する（板垣雄三教授の論文を参照、公共哲学シリーズ『公と私の思想史』東京大学出版会）。全ての人類が血縁で繋がれているということは生物学上の事実であるが、単なる事実以上の意味を有する真実なのである。『聖書』にも系図の物語が長々と登場するゆえんである。

結局、「古典は、『古』の眞相を描かうとして、その實、眞相以上の貴重な理想を描いたのである。」（前掲、難波田春夫『国家と経済』第三巻、六四～六七ページ。）

その後の平安時代は、皇室を中心とした貴族たちの国家体制が確立し、特に藤原氏の一族が政治の中枢を握った。

やがてそこに、平氏と源氏という武士集団が台頭し、中央の覇権を争うことになる。壇ノ浦の戦いはその決着であった。

降って鎌倉時代（一一九二～一三三三）になると、地方の開拓が進んで地方自治の精神が高まり、武士階級がその開墾と開墾地の経営を取りしきった。平安時代の貴族体制に代わる幕府体制とは、そのための仕組みであった。

日本において、十二世紀頃から分権的な幕府体制というものが、中央集権的な公家体制に代わって政治の実行責任組織となった。――鎌倉幕府は、守護・地頭の制度を導入して全国を一つの組織に纏め直し、その上で各地の武士に土地を基にする権力を与えた。それには、幾つかの理由があったと考えられる。因果律――社会組織の法則――の問題として、今日の政治経済学と経営学の知識から判断すれば、それが分かってくる。

当時のリーダーたちが、こうした分権化の法則を、体験上、学問上、どれだけ知っていたかは分からないが、成功した源頼朝・北条、後の将軍・足利尊氏らは、多かれ少なかれ、暗黙のうちにそれに則っていたに違いない。また、儒教の書物などからも、相当の知識を仕入れていたであろう。

第一は、**所有と管理の原則**である。生産手段とは、この時代には土地――耕やす農民が付属した区域であり社会――であるが、それは自ら開墾した人が所有し、実質的に利益を獲得する。したがってまた、その場所の防衛と治安についても、開墾者・所有者がその責任を負うのがもっとも能率が上がる、という原則である。これが「一所懸命」ということである。

日本の律令制度は、都にある中央政府が各地の末端まで支配し、土地は公地公民として国家・朝廷が所有し、管理するところであるという哲学と仕組みであった。それが崩れてきたのである。

日本人は、公有・共有の考えが好きである。「～はみんなの物」という感じが好まれる。「土地は国家のもの」と。しかし、それは、国土の範囲が小さい時は有効な組織方法であるが、開墾が進み、土地の範囲が拡大すると、うまく働かなくなる。日本の歴史においても、繰り返し、中央集権の波とそれに対抗する地方分権化の働きが現れるのは、ここに理由が存在する。

二十世紀から二十一世紀にかけては、中央集権化の波が衰え、地方分権化の波が上向く時代なのであるが、しかし自治体を大きく纏めようとする道州制論が現れるように、分権化の波ばかりではないのである。

第二は、**人間交流の原則**である。「去る者、日々に疎し」は真理である。地方の土地の所有者が遠い奈良

や京都に住む貴族・神社・寺院などであると、地方に住んで実際に土地を耕作し租税を納める住民は、主人の何たるかを知らない。租税を都まで運ぶのも容易でない。

なにより主人との精神的交流が希薄となり、忠誠を尽くすといっても無理となるのである。忠誠心が薄くなれば、領地争いや犯罪防止などのときに、遠くの都にいる主人の命令など威光を失なってくる。

現在のように、情報伝達手段が発達すればそうでもないが、昔は関東から都に手紙を届けるのにも相当な日数を要した。それでは、秩序は保てない。おまけに、地方の人々の教養が高まると、なんでも都の命令を仰ぐということも必要でなくなる。

ところが、源頼朝（一一四七～一一九九）の鎌倉幕府が築いた国家体制が、執権・北条氏の代に入って各地方の武士が力を高め、綻びを見せていた頃、**後醍醐天皇**がそれを引き締め中央集権国家を再興する目的で、倒幕運動を打ち出してくる（一三三二）。それ自体はある程度の合理性をそなえた改革であらんとしたものであった。

それはまた、国家の役職が古くからの身分によって決まっていたのを止め、身分制を崩して実力主義へと一歩前進させようとしたものであった。

しかし、天皇・朝廷側には、天皇のこの意図を支える人材の面が不足し、「公武水火」と形容されたほど、公家と武家の間での勢力争いが絶えなかった。公は公家側、武は武家側であって、両者が水と火のように並び立たぬということである。

特に倒幕の戦に参加した武士たちに対する「恩賞」の与え方において、武士に対する不公平さがあったようだ。天皇は、鎌倉方から召しあげた領土のうち、ご自身の側近の女性に広大な土地を与えられたという。

当時の恩賞とは、多額の戦費を自己負担する武士たちへの戦費後払いの意味があった。恩賞の大きさは軽すぎてはならず、配分比は出費と戦功に応じて公平でなければならないのであった。

だから武士たちの多くが、天皇の改革案の実行に疑問を抱いて、足利尊氏（高氏）の方に靡き、後醍醐天皇側の政策が支持されなくなった。背に腹は代えられず。武士の多くは利に走り、足利方についた。だから、人材の面でも改革派の後醍醐政権の側に不足を来たすことになったのである。

古代に大陸の孔子は、**「政は正なり」**といっていた。（『論語』顔淵篇）

正義を犯せば、政治は必ず行き詰まる。正義とは、当時としては、何より大地の恵みの配分における公正さである。公正さには三つある。

①スタート（機会の配分）の公正さつまり**法の下の平等**

②自由――いのちの多様性のこと――という恵みの拡大

③努力とそれに対する**報酬の公正さ**

機会の公正さとは、誰もが同じ分量だけ自由であることである。各々のいのちが伸びて行くために、天は公正な機会を欲する。「天に私覆なく地に私載なし」（孔子閒居）という。

政治がこうした公正さの筋道を踏み外せば、国民の心は政権から離反する。当時、国家（朝廷）としてはそれが一番警戒すべきことであったが、天皇周辺の補佐役に人を得ていなかったのだろうか。

国家改革とは、このような公正な機会と、自由活動の領域と、成果の分配とを、国民の間に普及させることであった。

後醍醐天皇は、儒教の新しい考え――宋に起こった朱子学――をもとに、古来の貴族の身分支配を変更し、朝廷中心の中央集権的でかつ実力主義の社会をつくろうとされたというが、思うようにいかなかったのである。しかし、そこに足利側の邪心が働いたからだ、という理由づけを余りに過大に位置づけることはできまい。政権自身の側にも大いに原因が存したのであった。

ともかく、こうして日本国民といういのち集団は、公平ですぐれたリーダーを欠くこととなり、室町時代におけるしばしの平和のあと、やがて大動乱期に入っていく。応仁の乱とそれに続く戦国時代がそれである。

世界史を見ると、略々同時代に、ヨーロッパでも、カトリック教会の支配に対抗し、人々が自由を得て人間性を開放したいという気運が高まり、広まろうとしていた。「ルネッサンス」の訪れである。

（二）国家の統合改革は、霊力を開発し再配分するにあり

以前にも少々述べたが、ここで国家といういのち集団の運動原理について改めて考えてみたい。古来、天皇と国民の関係は「いのちの力の応答関係」にある。天皇は神そのものという存在ではなく、神に祈る司祭者であり、預霊者――神意の取継者――である。

天皇は、宇宙自然の神仏に祈る存在である。祈りによって神仏に接触し、それを通じ、宇宙神仏の霊力、つまり生きるための知恵、知識、物作りの技術を預かり、神の言葉を預かる存在である。

神の言葉を預かる人の事を、予言者でなく、預言者というが、預言者として、神の言葉とともにいのちの「根元の力」（元気）を預り、それを天皇の政府つまり朝廷が国民に伝達し配分する、つまり地方から都の朝廷に集ってくる役人を通じて、都から各地へと伝え下すのである。それを通じて霊力が全国に「下る」、すなわち地方へと普及するのである。

昔から「下らない」と言うが、価値のないものは地方に歓迎されず、都から全国へと下らないから、「下らない」と言った。

かつては、各家庭に、時に田圃の畦に、工場に、商店に、ビルの屋上に、シンボルとして伊勢神宮の御幣が掲げてあったものである。神の使い手としての御使という人達が、全国津々浦々を歩いて配っていたのであろう。それは農民の生産活動を意味づける為の国民教育の役割を担っていた。

この霊力を巡る関係が天皇の働きを媒介とする「祭と政との一致」ということの真の内容なのであった。

この点、日本列島上での民族の神信仰の特質を、霊力とその配分の仕組みとして、専門家は次のように説明している。

（一）皇祖神らの支えで豊かに稔った稲穂以下の種々の物をもって今年の生産に励めば、ふたたびその霊の加護を得て豊かな収穫が期待できるといっているのである。とすれば、ここに供えられた稲穂以下の物は、皇祖神らの霊で満たされ、**豊作を引き出す力**をもったものと考えられることになろう。

（二）地方のすべての神社の中から、有力な神社が選ばれて、その祝部たちが、遠路はるばる帝都の神祇官にまで参集し、国家の祈年祭に参加し、皇祖神の霊力で満たされた稲穂を班与されていたのである。

祝部が旅の苦労を押してここまでやってきたのは、これによって、皇祖神すなわち大地と宇宙のすべてを司る神々の、霊の乗り移った幣物を手にすることができたからであった。

そして、それをもって郷土の神社に還り、そこで土地の神々に捧げ、その賦与された霊力を稲穂にまぜあわせれば、その土地の稲穂を宇宙の神の霊力を付加したものにすることができる。その稲穂を配下の村々の神社とそこに集う人々に賦与し、種籾として田に蒔かせれば、その絶大な霊力で収穫を期待できると考えた。

（三）律令国家が諸国有力諸社の祝部たちを神祇官に集めたのは、そこで与えた稲穂などに宿る皇祖神の霊力が弊帛にまざり、庶民の播く種籾にまで拡がり、それゆえに庶民の自発的な初穂献上として租税を収納することができると考えていたからである。

（義江彰夫『神仏習合』岩波新書、三三～三五ページ）

ところが、である。その後、神仏習合によって、神（神社）による霊力の専有体制は変質し、仏（寺院）も参加してくる。そして、神仏習合には、神の特質――物を産む働き――と、仏の特質――殺生戒・自然保護――と、両者の結合という特筆すべき効能があった。この時、仏教優位の習合思想では、大菩薩（仏）が神道にいう神々の姿に化身したと考える。（『四日市市史』第十六巻、一〇〇ページには、多度神宮寺の記事あり。）

その結果、日本の神社とお寺が、共に鬱蒼と茂る樹木の森を形づくってきたが、そのことは、地球環境保全に役立つような、誇るべき知恵が日本の歴史に保存されていることを物語るのである。

祭りにおける祈りの本質とは何か。宇宙天地の神、祖先神、あるいは天など、名称はいろいろあるが、一般に国民を代表して天皇が、神仏に対して、数々の恵みを賜っていることを感謝し、次に、国民のしあわせを高めていただくように、と願うことである。また、国民も、その神の心を身につけ、自らのいのちの力を高めて下さいと――天皇の祈りを通じて――神仏に願うことである。

祈りとは、さらに進んでは、お願いを超えて、代々の天皇の系統――日本国は君民同組の家族的国家であるから、総本家たる皇室――と国民が心を一にし、天地神仏の心を学び、「その心に従って生きて行きます」ということを「誓う」ことである。その例を、記紀はアマテラスとスサノヲとの間の誓ひに表わしている。神意の伺い方は、近代では宣伝や討論といった民主主義的な方法を第一に尊重するけれども、必ずしもそれと限らない。

神仏の前で誓い合うことを古代人は「うけひ」（誓ひ）といったが、天皇も国民も一緒になって天地神仏に誓いをするのである。このように、願うことから誓うことへ、さらに暮らしにおける実践へと、祈りは発展する。そのとき、国民の精神と生命力が高まるのである。

現代人のわれわれは、民族の伝統たるこの点を、どうも忘却してしまっているのではないか。

マッカーサー占領下での「天皇の人間宣言」は、このような天皇と国民とが一体となった祈りの関係を破壊して、日本国民が一体となり強力な国家たることを止めさせようとする意図が込められていた。国民的信仰の破壊である。

こうした祈りによって、天皇と国民の全体に、宇宙自然――天皇と国民の内部――から優れた生命力が発現してきて、その活動力が増大することになるのである。これが祭政一致ということであって、世界各国に様々な形で行われている。

古代の信仰と「誓約」には、アマテラスとスサノオの例があるが、その意味については、土橋寛『日本語

に探る古代信仰』（中公新書）参照。なお、「うけい」とは、神の前で行う一種の占いであり、心身を清めて神意をうかがうことであって、武力による決着のつけ方を避けた平和的な方法なのである。（林道義『日本神話の英雄たち』文春新書、五九ページ以下。）

国民の方は、朝廷から下される霊力を各々の生業において恵みとして受け取り、各自の所において――一所懸命に、かつ一生懸命に――心を清め工夫を重ねて生産力を高める。

その生産力には、人のいのちの誕生から臨終、そして世代間の継承がかかわる。生活に必要なあらゆる力、つまり心を浄める力、健康になる力、病気治癒の力、稲をはじめとして作物生育の力、物造りの力、社会のより良い人間関係を結ぶ力、子供を産む授産の力、子孫繁昌の力、教育する力、死後極楽へと往生する力、安心立命する力、までがすべて含まれる。これは神秘的なものでも空想でもない。各人の心理と生理と、社会の集団構成の理にのっとっている。

朝廷から神の恵みとして受け渡される元の力つまり霊力は、国民にとってあらゆる福を産出する根源力であり、根源徳にほかならないのである。

西洋のカトリック国家では法皇と神父が、アメリカのようなプロテスタント国家では大統領と牧師が、イスラム国家では法の指導者（法学者）が、ヒンドゥー国家では寺院の指導者が、儒教の国では皇帝が、そのような精神的な生命力の伝達者となってきた。

現代日本のわれわれは、この「歴史の秘儀」を看過してはならない。この点を力説することは保守反動で

も封建的でもない、いのち集団の永遠の法則に着眼することにほかならぬのである。

私は、「代々の一貫した天皇」の働き、特に「祈り」について、日本人自身、とんでもない誤解を抱えて来ていると思う。誤解というより、理解不足というべきか。その真の姿を知らない、というべきかも知れない。

最も大きな誤解とは、二十世紀のそれである。まずは左翼の全体主義イデオロギーからの無理解がある。また先に引用した天皇の「人間宣言」を強制したような、世俗的な無信仰の自由主義からの無理解もある。滑稽なことに、結論は両陣営ともに同じことに帰着し、天皇は封建的な君主であり、人間差別の権化であり、信仰という人間の自由を抑圧する根源的な悪装置である、と決めつける。

否、このどちらでもない右の側の感情的な天皇主義者の提出する方法にも、浅からぬ無理解が付きまとっていて、それゆえ、天皇の名の下に様々の不要な問題を起こしてきたのではないか。

こうした無理解や誤解には、人間関係、特に政治というものを「支配と非支配との関係」からしか見ないところの、ある種の政治学イデオロギーが影響しているようである。例えば、親と子の関係は、支配と非支配の軸で解釈すると、その本質を理解できず、核心を見失うことになるだろう。

では、一般の宗教に見る「神と信者との関係」はどうか。ルターなどは、「キリスト教のいう神に対して、

人（信者）は奴隷である」という関係を説いた。むろん、奴隷といっても、アメリカにおけるかつての黒人奴隷のように、人格を認められず売り買いされるような、「人格なき物」というべき存在ではない。神に絶対服従し、そうすることを通じて自由になる、という存在であろう。

しかし、ルターの宗教的説明は、日本の天皇と国民との関係には妥当しない。国民は天皇に対しての奴隷ではない。

ちなみに、キリスト教の政治世界では、パウロ（?～六四頃）の発言と、アウグスティヌス（三五四～四三〇）の『神の国』（De civitate Dei）の考え方が、深い影響を及ぼしてきたので、それを参照しておこう。（M・バコー著、坂口・鷲見訳『テオクラシー』創文社、一七～一八ページ、参照。）

パウロによれば、われわれ人間は物質と精神とからなり、この世の地上の国家が物質的利益に配慮するのに対し、教会は精神的利益のために配慮する。このように、われわれ人類は国家と教会という二つの世界に所属するが、ただいずれも神から出ているものである。

国家は剣を手にして自らの権威を強制しまた擁護するが、教会は自らの権威を愛によって行使しまた霊的制裁によって保持するのみである。（『テオクラシー』一八ページ）

アウグスティヌスは、パウロのこの説に従って次のように述べる。

キリスト教徒は、二つの国に属している。彼らは、国家の規範に従わねばならない。それは、神が国家の存在を望み給うが故である。だが同時に、キリスト教徒は、自分たちの地上におけるすべての活動が天の国の戒律に従わなければならぬこと、さらに自分たちがこの地上の国を彼岸において、即ち地上における人類の時代の終わる時はじめて、完全に実現するであろうことを心得ていなければならない。（一七ページ）

人間的、可視的、物質的で、人間の国、すなわち地の国では、必ずしもキリスト教徒によって指導される必要はなく、その首長の信仰が何であるかは大して重要ではない。（一六～一七ページ、これは治教一致にこだわらぬということか――永安。）

結局、天皇と国民との関係は、「神話伝承」に基づいている。だから、何らかの形での国民投票によって決まるというものではない。ある時期に生きる人々の意思は、低い投票率が示すように、まことに浮動的で不完全な意思でしかない。

現行の「日本国憲法」では――アメリカ・チームの作業によって――この天皇というものの歴史的本質を、民主主義政治学と法律学とに解消し、そうした浅薄な規定を作文して盛り込んだ。「天皇の地位は国民の総意に基づく」というが、これは暗黙のうちに国民投票によって天皇の地位を廃止することもできるという趣旨のもので、ヒトラーやスターリンを産んだ「投票的民主主義による革命」を含んでいる。

天皇の伝統とは、投票を完全には否定しないが、なおそれを超えて生きる「聖なる歴史的伝統」である。また、天皇の存在は、欧州の絶対君主を正当化する理論であった王権神授説が、国民の支持と無関係に説くような、神との一方的な関係をのみ視野に入れる神懸り的な存在でもない。絶対権力を振うような天皇も、歴史上、時として現れた。天皇といえども生身の人間であるから、そういう異変もあり得る。しかし、そういう天皇は正常な天皇ではない。

日本の古典たる『記紀』には、あからさまに、そうした暴君的天皇の事例も幾つかは載せるが、それは『記紀』が「作為的な道徳」の書物でなく、「自然の道徳」の歴史書であることを物語るのではないか。善悪の基準について、編集記録者の作為があるなら、巻頭から巻末まで、もっと綺麗事の記事で埋めたであろう。

尤も、中国大陸の王朝史では、取って代わった新王朝が前の王朝の「不当性」つまりなぜ徳が尽きて交替する他なかったかを描くから、前の王朝の事を悪し様に記すことがあるといえる。

日本の天皇と国民とは、聖なる伝統の基礎の上に、天皇は愛・慈悲の心に基づいて国民に奉仕し、国民は感謝と報恩の心で天皇に奉仕を捧げる、という関係にある。しかしそれは、物の売り買いとか慈善のような、相互に善を提供するから出来上がるというような、遣り取りの関係でもない。何か一つの種類の関係に還元して理解しようとすると、その本質がつかめないものなのである。還元主義は成り立たない。

日本の天皇は、永久の、究極の、名もない神を、想定する。――日本人の先祖は、究極の存在について、否定するのでなく、議論せず、「言挙げしない」という態度を保つ。

明白に論じ明確に規定しないと納得しない、承服しない、というのが現代人一般の心の癖であるが、われわれ人間は、実はすべてのことをそのように明確化した上で人生を歩んでいるのではない。

日本人は論理や概念というより、歴史と事実を感じ取ろうとする。こうした歴史の中に指針を得ようとする所に、「歴史の伝統を参照する」という精神のフロンティアが開けるのではないか。代々の天皇という存在は、このようにしてこそ了解されよう。

さらに、「天皇が祈る」と言えば、国民の信教自由を否定する国家体制であるかのように非難する向きもあろうが、それは誤りである。天皇の祈りへの国民の参加は、元来強制される法的義務ではなく、自由である。

日本では、一九二〇～四〇年代の一時期に、先に述べた逸脱した天皇主義者が牛耳るという体制がそういう傾向を持ったが、それは、全世界が総力戦の必要上、全体主義に傾いた時代の一つの対応であったのである。その特殊現象を引き伸ばして、長い歴史全体に当てはめることは事実に合わない。

代々の天皇の祈りは、独占的、排他的、画一的な祈りではないのである。

天皇は祈りを実行される。今後、国民の内には、古くからの儒教、仏教、神道を信じる人もいる。キリスト教徒も、新来のイスラム教徒も、いることになろう。いろんな新興宗教の人もいる。いずれも、天皇はその人々を含んだ国民のことを代表して――代理してではなく――お祈りになる。世界人類のこともお祈りになる。別け隔ては少しもない。

太陽は、地球上において、どの信仰を持つ人々をも照らす。地球という大地はすべての人々を載せて支える。そのような「普遍的な恵みの祈り」が天皇の祈りの本質なのである。

われわれ人類は、まだ、境界線をひいて宇宙を、社会を、「異なる空間」に分割する「ユークリッド的な世界観」に囚われている。その結果が、個人個人は別々の存在であるとする観念を生む。そういう囚われを超越したのが、「非ユークリッド世界観」である。アインシュタインの宇宙論は、非ユークリッド世界観・宇宙観であるというが、それは常人にはなかなか理解できない。

日本の天皇もまた、非ユークリッド的存在なのではないか。（永安幸正『政治経済学』成文堂、「非ユークリッド原理」参照）

そしてそれが、地球上のあらゆる存在の在り様であるから、天皇は、なにも日本独自の存在として「万邦無比」でもないのである。**万邦有比**なのである。

まさしくこの点を世界の人々が、時に日本人自身さえも、誤解する。無比とは第一である、最高であるという意味よりは、各々の存在は個性的特殊的であって、一本のはしご段の上で序列づけられるものではない、ということと解したい。それは、どこにでも見いだされるタイプの存在なのである。アメリカでも、イギリスでも、中国でも、すべてしかり。

（三）日本における天皇の意味はいずこにありや

ここで、「なぜ天皇なのか」という疑問が出されよう。これは尤もな問いであり、かつ難問である。日本列島上での国家共同体の長い歴史に由来する、というのがそれへの答えである。

これは自然（じねん）の生成の結果であって、権力先行の覇道的、人為的な結果ではない。権力先行のものであれば、絶対に永続きしない。こういう点が見えない人には、歴史の秘密はどこまで行っても解けまい。

日本列島上では、はるかな昔、天皇と皇室と朝廷が、その国家創成の古より――幾度かの消長はあれ――民族統合の司祭の中心として、長い歴史を保っている。その精神的な働きを、国民が集団的な深層心理の基底に受け入れ、それを通じて国民一人ひとりと、国民集団との、双方のレベルで、生命力を高めてきたのである。

霊力とか生命力というものは、そうした長い歴史伝統を根柢において自覚するとき、自覚する人々の心身の中に生きて働き出すようになっている。天皇が神々への祈りを通じて受け取る霊力とは、実は国民一人ひとりの心身の中に抱く潜在霊力でもあるのである。

宇宙に普く存在する電磁力は、自らの電気器具を通じて、スイッチを入れる人にのみ現れて働く。昔から「神は人によりて尊し」といわれるが、これがいのちというものの真理でもあろう。

仏教では悉有仏性といい、キリスト教では神の精霊が万物に浸透すると教える。儒教等では天の心命が一切に貫徹すると見る。

中国には、物事を逆から述べた二つの思想体系があり、日本にも古くから入ってきている。

「天下は国の本なり、国は郷の本なり、郷は家の本なり、家は人の本なり、人は身の本なり、身は治の本なり」（管子）

「修身、斉家、治国、平天下」（大学）

双方とも根本は、一人ひとりの人格・人心の向上にあり、ということである。

これは、ヨーロッパの伝統に働いてきた「補完性の原理」という思想と同一のものといってよい。

補完性の原理（subsidiarity principle）というのは、先にも述べたが、ヨーロッパで古くから存在してきた考えであり、今日のヨーロッパ連盟（EU）でも採用されている社会共同体の組み立て方の原理である。社会は、個人という人格から始まって、家族、地域社会、国家、さらには地球社会へと、より大きな規模の共同体へと到る。

だから、個人ができることは個人が、個人でできないことは家族が、家族にできないことは地域が、地域でできないことは国家が、というようにできるだけ身近な共同体で執り行うという原理である。

これは、個々の人間においては、一個の人格が神の似姿として絶対的に尊重される存在であり、幾つもの重なり合う、様々な共同体のメンバーであって、決してそれから孤立した無縁の、あるいは自由勝手な存在でなく、個人は共同体のニーズに応える必要があること、同時にすべての共同体は個人の人格を尊重すること、というような個人と共同体の間の双方向的な関係を含むものといえる。

歴史を比較すると、洋の東西を通じて、また古今を通じて、略々これと同じような構造的思想が見出されるのである。そのような思想なくして、広大な国家というものは統治できぬからである。

国家という「いのち集団」は、国民の意識とか精神とか民族の魂というようなものを通じて纏り、形成され発展していく。

日本列島上のわれわれの国家の場合でいえば、奈良時代がこういう基本条件を作る時代であった。その基本が出来ていく段階とその物語が、遠い過去からの伝承として記録される物語である。天孫降臨がそれであり、次は神武の即位と東征であり、それから始まって、聖徳太子による十七条憲法の制定（六〇四）であり、大宝律令や養老律令の制定であったといえよう。

結局、国家といういのち集団は、次の三つの原理から成り立つのである。

①国民としての人間一人ひとりのとらえ方（人格の原理）

②国民集団の纏め方（国民統合の原理）

③外国との間の在り方（国際関係の原理）

聖徳太子は、人はみな凡夫であり、人間は和において共生すると説き、かつ隋に使節を遣り、「日の没する国」に対し、自国を「日出ずる国」と称して、この国家の基本的立場を作りあげたのであった。

近代、アメリカ合衆国は、一七七六年、コネチカット州のフィラデルフィアに十三の州の代表が集まって独立宣言を発表し、やがて憲法も作って、どうにか一つの国家として体裁を仕上げたが、今日のような統一的な合衆国の姿となったのは、やっと十九世紀の半ば、南北戦争の後である。

それは、日本の明治維新と近い頃であった一八六〇年代であるから、日本の明治維新と、殆ど時代の差はないのであり、一八五三年のペリー提督（一七九四～一八五八）率いる黒船の来航は、その頃のアメリカの国家伸長を告げるアイサツ回りでもあったわけである。

こうしてみると、国家が成り立つには、次の条件が必要であることが分かる。

①国家には、統合の象徴がなければならない。つまり、ただならぬ求心力をもって人々の利害を統合し、調和へと纏め、人々の心の中点となる人格者の存在である。人間のいのち集団には、この意味での象徴が欠かせない。ミツバチ社会には女王バチがおり、サル社会にはボスがいる。立派な企業には、立派な創業者とその系列が存在する。国家では元首とその系列である。

いくら民主主義といって万民に主権が分属するとしても、必ず強力なリーダーを求める、否、リーダーを選出する手続きの一つが民主主義に他ならない。

古代日本では、国家成立の条件は、国民がその価値を認め、尊敬し、恭順し「まつろふ」天皇及び皇室——天皇家の一家族ではなく一族のこと——と、その政府である朝廷とが成立することによって、整えられた。

『古事記』とか『日本書紀』という古典は、こうした基本条件についての心の事実つまり「心実」を表わす物語として、伝承を集大成し編纂され、国民の中に受け入れられたといえよう。

アメリカ建国の地フィラデルフィアに行くと、油紙に書かれた独立宣言や憲法草案の原文の写しを買うことができるが、これこそアメリカの「記紀」であろう。

むろん、物語は何も文書の形に限らない。公式に人々に「統合」の精神を呼び起こすものなら何でもよい。日本では、それは伊勢神宮であり、各地の神社であり、近代では明治神宮あり、靖国神社、各地の護国神社である。

②国家には**中心文化**が存在しなければならぬ。イラクのように、クルド人あり、シーア派あり、スンニー派ありと、違った宗教・宗派、民族が対立していると、一旦分裂が起きれば、国として体をなすことが難しい。かつての「ユーゴ」（バルカン半島）もそうである。

国民の集団心理の深層に「象徴」の権威が根づき、それに対して国民が無意識にプラスの反応をするようになることが求められるのである。その深層の形成には、かなり長い時間がかかり、国によっては数百年の時を要する。集団の心理の熟成には時を要するからである。歴史では、古いものほど価値が高まり、古くから続くほど意味が深まる所以である。

イギリスでは、現在の王室が、悲しいことにスキャンダルに揺れ、欠点を曝け出しているが、それでもなお、過半数の国民の無意識の中に、辛うじてながら、権威を保っている。

他方、フランスは王制——ルイ王朝——を倒した代りに強力な大統領を設け、ヴェルサイユ宮殿を保存し、国民がフランス文化に誇りを懐き、フランス語の純潔を守ろうと努力する。これは有名な話である。

統一したドイツは臨時の首都ボンから、歴史の首都ベルリンへと、都を還した。

アメリカでもジョージ・ワシントン（一七三二～九九）以来、中興の祖としてエイブラハム・リンカーン（一八〇九～六五）が出現し、アメリカ国家にとって画期的な意味を物語る働きをし、彼を通じて大統領職が名実ともに南北を覆う権威を帯びるものとなった。南北戦争は、日本の歴史では建武の中興（新政）に相当するといえようか。

人工国家アメリカでは、自然の歴史を欠くため、四年おきに大統領選挙に熱中し、過剰なまでに星条旗と国家と英語とに忠誠を誓うという行事を繰り返す——あたかも伊勢神宮における二十年毎の遷宮のように。

アメリカ合衆国の近々三百年の歴史は——個体発生は系統発生を繰り返すというように——国家といういのち集団の受胎、胎児、誕生、そして養育を、集中的に物語っているのではないか。

③国家には、**国民のいのちの生産力を高める権威**が必要である。人格としての存在が、なぜ国民に受け入れられて中心存在になるのか。逆にそれが、なにゆえ国民から崇敬されるのか。

それは、その中心人格につながり、象徴としてその価値を敬い、その心を心とすることが、国民各自のいのちの生産力を高めるからである。正当性をもった有徳者が人格の範型となり、国民各自のいのちの生き方に秩序を与え、人格修養のガイドラインすなわち倫理となり道徳となるからである。

これが国民道徳というものである。そのためには、やはり長い歴史の伝統が基礎になる。歴史の伝統は、不純物や逸脱を正し、浄化していくからである。歴史には淘汰の作用があり、蓄積の効用が秘められている。

国家においては、集合無意識（民族の魂）と個人の精神（個人の魂）とは相互に強めあう関係にある。国家において、その無意識が中心を失い、矛盾し、分裂を孕むようになる時は、国家改革の必要が告げられる時なのである。日本の歴史でいえば、源平の争乱、南北朝の対立、応仁の乱と戦国時代、近代では明治維新と大正の政党政治の大混乱である。

そして、敗戦の一九四五年に始まったマッカーサー改革の影響と、今日のグローバル化の流れとによって、現代の日本は、まさしくその改革の時に当たっているのではないか。

ここに**霊力**と名付けるものについて、改めて現代風に考えておこう。

霊力とは天地、神仏から頂く恵みの力であり、大宇宙のいのちの「むすび」の力のことであり、一切を生み出す根源の力であって、宗教が古くから注目し、天地自然の力とか神仏の力といってきたものである。

それは、人類にとっては感じる力、考える力、判断する力などの、いのちの力の根源にある「無意識層」であり、それを元にした物や情報の生産能力なのである。元気――もとの気――とはそのことである。曲阜の孔子廟に訪ねると、この言葉が掲げてあるが、「生産力を生み出す生産力」（ドイツの政治経済学者、F・リスト）といえるものである。

もちろん、霊力とは、神や仏にお供えやお賽銭を上げてお願いすれば与えられるというような、都合の良いものでは決してない。そうではなく、神仏の心を学んでそれを毎日の生産と生活において活用すれば、自ら湧き出る生産力であり、祈りとか祭りはそういう生産力を発揮するための心事であり儀式なのである。

霊力発現の要点は、現代風にいうならば、自然界に働きかけ、人間の自然・人間性を開拓し、科学技術を発展させ、文化を涵養するにある。もともと神社や寺院はそういう知恵の仲介所であり継承の場であった筈である。継続と伝統というものの意味を、現代人はもっともっと強く考えよう。

先人は、特に叡知によって、精神の力を善生産の方向へと育成し、国民の生命力を高めるという働きを、古来、徳と呼んできた。それは、ギリシア語でアレテー（arete）、ラテン語でヴィルトゥス（virtus）、英語では品性（サミュエル・スマイルズ『品性論』、character）とも名づけられ重要視された。日本の国家で

は、霊力とは天皇と国民の徳・品性の総体なのであった。アメリカでは、大統領と国民のそれであった。

国家でなくとも、宗教や芸事の家元の系列、会社の中の伝統の系列、大学など教育研究組織における伝統の系列がある。

もちろん、祈りといっても、霊力といっても、現代国家の場合、信仰の自由があるから、形式はいろいろであってよい。神道式にか、仏教式にか、儒教式にか、現代でいえばその他、キリスト教やヒンドゥー教、イスラム教などの祈り方もあるだろう。どんな形式でも、神仏への祈りという本質の点では、一貫して変わりはない。

日本国民の歴史には、江戸時代の排キリスト教、明治初期の廃仏毀釈などが行われた過激な時期を除いて、神仏習合――儒も――といって、いろいろな形式の祈りの共存と合成を認める寛容さが備わっている。精神的には、**万教習合**を考えるのが今日のグローバル時代であろうか。習合とは画一化ではなく、多様性の共存である。

こうして、日本の歴史には、**「祈りの共有」と「国民生命力の発揚」という二重の共同性**が見出される。これからの人類世界にとって、これはモデルの一つとなるのではないだろうか。

デモクラシーは、代表決定のための多数決という単なる数の計算でなく、普遍意志（ルッソー）と名づけられる神・天の意志を発見する手続きであり、古代ギリシアや、日本の天安河原における「神集い」に現

れたものに等しい。

それが、近代西欧でヒューマニズムによって新しく基礎づけられた。今後はこの二重の共同性によって導かれるべきだろう。この点、聖徳太子の十七条憲法においては、エゴイズムに傾く各個人の利害調整に陥ることを超えて、デモクラシーを精神的に改革する方向づけが見出されるのではないか。

たしかに、「義は利の和なり」（呂氏春秋、無義）――利の公平な共存の原則――ともいえるが、もっと根本に、私利を超える精神が正義として各人の心の中に育たねばならないのである。利の「公共化」であろう。（下程勇吉『日本の精神的伝統』広池出版、三四～三五ページを参照。）

祈りと霊力と国民生産力の間の深い関係は、もちろん日本だけでなく、各国に現れている。霊力は欧米のイギリスにも、フランスにも、ドイツにも、アメリカにも、近くはタイ、中国、韓国などにも存在する。われわれの各家庭にも多かれ少なかれ活きて働いている。

イギリスでは、エリザベス一世（一五三三～一六〇三）のころから、祭祀の中心として国民の生命力を沸き立たせ、生命力を発現させてあの大英帝国を生んだのである。

歴史を理解するには、先人たちの努力の中に、こうした秘密を見いだす慧眼を持ちたい。

アメリカでは、歴史は短かいし、また君主制の国家でもなく共和制の国家であるが、大統領は選挙で選ばれる「君主」――ローマ帝国流の選挙皇帝のような存在――である。

国民統合の中心として、『聖書』に手を置いて、建国宣言の精神を受け継ぎ、国民は絶えずそこに帰り着くことを通じて、偉大な国民生命力を発揮している。つまり、大統領が偉大さを高めれば、国民も弥栄となり、国民が栄えれば大統領も栄光を増す、という平行の関係があるのであろう。

アメリカは、多民族、多人種を統合吸収しており、いわば古代ローマ帝国の現代版なのである。やがて中国もそのようになるかも知れない。

しかし、アメリカは、幾つかの州（ステイト、元来は国家）が集まった合衆国――合州国――であって、それゆえ時折、分裂しそうになる。そういう時期には、分裂傾向を押さえ、国民の心を一点に集中させ統合する偉大な大統領の出現を求める。

一九六〇年に大統領に選ばれたJ・F・ケネディ（一九一七～六三）は、まさしくそうであったが、就任演説の中で次のように述べている。

「情熱(energy)、信仰(faith)、そして献身(devotion)」

「諸君、国家に何かを要求するよりも、国家に対して、何ができるかを考えよう。」

「そして世界中の皆さん、アメリカが皆さんのために何が出来るかではなく、人類の自由の実現のために、お互いわれわれが力を合わせて、何が出来るかを考えましょう。」

(And so, my fellow Americans: ask not what your country can do for you - ask what you can do for your country.

My fellow citizens of the world: ask not what America will do for you, but what together we can for the freedom of man.)

ケネディは、このように呼びかけることができた。それは、強い自覚が彼の精神の根柢にあったからであろう。アメリカ国民は、こういう情熱のこもった呼びかけに、とてもよく反応する。いざという時は、国民もその気になって国難に取り組む。

就任演説の原稿は、英知を集め、徹底して練りに練って作られると伝え聞く。演説は政策の羅列でなく、大統領の真剣な精神と哲学を打ち込んでいる。新たな歴史の扉は、どこの国でもこういう人物の心と手によって開かれるのであろう。日本にも、たまにはこういう首相を戴きたいものである。

よく考えてみれば、共和制でも君主制でも、この国民統合の原理は同じように一貫しているのではないか。

（四）政治と国民が霊力を活かす

古来、日本では、天皇・皇室・朝廷による霊力・生産力の配分の在り方が、政治の体制であった。だから、天皇・朝廷の霊力の盛衰と、国民のいのちの生産力の盛衰とは平行しており、対応関係にある。

国民の生産力が旺盛になると、国民は、天皇が天地の神から預かって伝えて「下さる」ところの力のお蔭

として、報恩・返恩のため、国家つまり天皇・朝廷・国家に租庸調の税を喜んで納めたのである。

この宇宙自然・神仏と皇室と国民との関係は、次の一連の関係にある。

①祈り
②徳・霊力の預かり
③徳・霊力の運びと分配
④それへの国民の報恩

このような思想と行為は、『旧約聖書』に登場する諸民族の歴史の中にも、いたるところに記されているから、古くは東西を問わず存在していたものであろう。

このダイナミックな関係は、歴史の発展を生み出し、歴史の発展とともに進化する性質のものなのである。現代のように国民の生業が農林漁業のみでなくなり、工業となり、商業、情報産業を含むものへと変遷し拡大しても、天地の間に行われるいのち集団の活動は少しも滞りなく、それを包みこんで成り立つ。

天皇は、稲を手植し刈り取りをなさるだけでない。その御心においては、すべて、工場で製造されるロボットも、コンピュータも、神仏におそなえなさる筈である。稲はそのシンボルにすぎないのである。だから、天皇の園遊会には各界から人々が招かれるのである。

話をもとに戻そう。

後醍醐天皇の建武の中興・新政（一三三四～三七）とは、源氏亡きあとの北条一族と鎌倉幕府による武家支配を倒すことであった。幕府は、中央の朝廷をないがしろにし、私生活も腐敗していたのである。そして、朝廷自身も、古くからの身分制度に固まった貴族支配の残滓を清掃し、新興の貴族と忠誠なる武家の支えを基礎に、実力主義に基づく新たな政治を造ろうとしたものであったといえよう。

しかし、日本の古典によれば、例外もあるけれど、天皇不親政が正道であった。後醍醐天皇が理想とした「天皇親政」は正道ではないのであった。この点は既に述べた。

後醍醐天皇はやゝ性急に、政治の前面に立って親政を行おうとなされた。改革を目指すリーダーは、英邁であっても、天と時と人が合わなければ、往々にして悲劇に終わることがあるのである。

もしも、朝廷の政治が、正義という天地の公道を踏み外すことになれば、どの天皇といえども、親政政治は失敗する。そうなると、その天皇は退位され、天地の公道に沿った方へと交代される。天皇位は終身制ではなかった。

建武の中興においては、戦後処理の最大任務である恩賞の配分がいささか正義に反していた。いろいろ調べてみると、戦争では、因果の法則が厳しく貫徹する。戦争とは、技術であり、政治であり、経済の法則の戦いなのである。たまに、嵐が来たとか、突風が吹くとか、寝返りが起こったなどの偶然も作用することはする。しかし、全く偶然ばかりが戦争の歴史を形造るのではない。やはり、必然の法則というものが読みとれる。これに反すると、国家改革は躓く。

経済問題としてみれば、戦争では経済の法則を破ることはできぬ。十三、十四世紀、東海道を隔てて、関西の大阪や京都に戦場があり、東北や関東からそこに参加するとなれば、どれだけ多額の費用がかかったか。膨大な金額と人員を要したであろう。

装備にもよるであろうが、馬に乗る武将が一人、それに付き従う郎党が少なくとも五人とすれば、道中と戦場での滞在が併せて二ヵ月として、毎日の食事の費用、弓と矢という武器を整える費用、鎧とか着るものの費用も馬鹿にならない。今日の金額で数百万円は下るまい。

それに加えて、戦場に出掛けるということは武士・郎党にとっては領地（銃後）を留守にし、田畑の耕作を休んで行くことを意味した。領地を留守にすれば、他所者が侵入して女子供を攫ったり、財産に危害を加えたりするという危惧もあったろう。

かの「総力戦」という言葉は二十世紀に入ってからのものであるが、実状は、いつの時代でも、古来、武器を交える戦場ばかりが戦いの現場なのではなく、郷里に残してきた領地も守らねばならないので、そこも戦場に等しい。やはり武将は戦場も銃後もともに自衛しなくてはならないのである。

戦国時代のことを描いた映画などで、旗を閃かして馬に乗った武将が、「われこそは、どこそこの誰々ナリー」と大音声を張り上げて、周りの者に聞こえるように名乗りを行うという場面があるが、あれは、どこの誰兵衛が、どういう武勲を立てたかを、人々に知ってもらい、あとで幕府や総大将から恩賞を頂くための目撃証人になってもらうためであったろう。

恩賞を頂かないと、戦争が終わってからの一族郎党の暮らしが立たない。立たないと次の戦の準備ができない。十分に準備ができぬと次の戦に負けることになる。しかし、総大将としては、恩賞を与えるといっても、そうそう土地を敵から奪って増やすわけにいかないから、銀山とか金山をやっきになって掘り、お金を殖やすことに血道を上げることになる。

例えば、現在は行政区域では島根県になっているが、昔からの「くに」の名前では石見国にあった「石見銀山」（太田市近く）は、品位の高い優れた銀を産出する鉱山であって、出雲・鳥取地方に勢力を張っていた戦国武将・尼子氏が支配していた所であった。

後発組の安芸（広島県）の武将・毛利元就が、この鉱山を執念深く狙って、ついにそれを手に入れ、軍資金が急増したので中国地方に覇を唱え、秀吉さえ手こずらせる強力武将へとのし上がることができた。戦上手な所に加え、豊富な軍資金が、元就の戦争を勝利させたのである。

戦いの後の恩賞の大きさと、その分配の公平さを確保することは、国家の優れた総大将たる者の不可欠の条件であった。やはり、「政は正なり」（『論語』）という孔子の言葉は、この点、日本にも当てはまる条理であったのである。

かの「建武」における後醍醐天皇側と足利高氏（尊氏）側との間に生じた当時の武士たちの中での人気の

差は、主としてこの恩賞の与え方の上手下手にあったといえよう。正統性から言えば、後醍醐天皇の側に、高氏は――源氏であって皇室の別れであるとはいうものの――比ぶべくも無かったのにである。

クラウゼヴィッツ（『戦争論』）が言ったように、今も昔も、戦争とは政治の延長であり、もう一つの形での政治である。また逆に、政治も、戦争のもう一つの形であるといえる。

そして、背に腹は代えられない。戦争とは軍（武器）と軍（武器）の戦いであるばかりでなく、経費の調達と恩賞の分配という経済と経済の戦いでもあるのである。その後、時代は下って、遠く二十世紀に行われた大東亜戦争・太平洋戦争の勝敗も、結局は国力・経済力によって決まったのである。

こうしてみると、京都を中心とする中央集権を目指した建武の中興がうまくいかなかった深い理由が、おのずから明らかとなるのではないか。

まず、武士が各地で自ら土地を開墾し、生産力を高めていたことである。そして、中央の神道に頼るばかりでなく、仏教――朝廷自らが国分寺を造って全国に広めた――を学び、それによって郷土・地下にいて心の方針を立てることができるようになり、京都中央の朝廷に参上してそこから配分される都の霊力を、地方が必要としなくなったことであろう。

霊力の地方自給化であろう。つまり、当時の神仏習合思想によって、仏教が神道よりも上位の普遍的な力を持つ、ということになったからではないか。

朝廷は各地に、国分（神）社でなく、仏教による国分寺（院）を造営したが、それは朝廷の意図に反して――というより仏教信仰の意向に沿って――中央の神宮とその系統の神社の権威を低め、精神の上でも地方分権を促進した。中央に集中した精神的な権威を薄め、地方へと分散化したのである。

日本国家が、霊力において地方分権化し、地方自治としての封建制へと移っていくゆえんがここにあった。

日本列島の上で発達した土着の精神であり先輩格の神道は、仏教の力を借りることになり、各地の人々にとっては、なにもいちいち都へお願いに上って、徳と霊力を貰って来なくても済ますことができ、各地方は地元の寺社を舞台とする信仰と祭りをもって間に合うようになった。都の朝廷の威信は少しく不要になった。

このように中世の人々は考えた――それは実は誤解であったことが、十九世紀になって判明するのであるが。

十二世紀、世の中は、すでに地方の自給と自治の時代へと移っていた。東国での平将門の乱（九三五もしくは九三九～四一）は、早くもそのことを予告するものであったのである。

こうした霊力・生産力の構造の移り変わりを無視しては、国家改革は、なし遂げられなくなるのである。これこそ、建武の中興の失敗がわれわれに遺した教訓である。ここには、神仏習合というものの矛盾した役割が混在したのであった。

それから、忘れてならぬことが、今一つある。歴史の教訓は、プラスの勝利とか成功だけから得られるのではないということである。苦難の時をどのように耐え抜くか、「耐えて待つ」ということである。それを実行した先人の伝記や記録が、励ましとなる、ということである。

私事で恐れ入るが、筆者の父は、大正初めの生まれの世代であり、河内の豪族、楠木正成（一二九四～一三三六）の忠節ぶりを示す物語に感動して育った世代であり、私はその子供である。正成は南北朝時代の後醍醐天皇側の忠臣であった。

父が好んで教えてくれたことで、私に役立っている「ことば」がある。

「親孝行せよ」

「必ず成功すると考えよ」

「初志を貫徹せよ」

「七転び八起き」

「七生報国」

すなわち、不撓不屈の魂、生まれかわりの精神、永生への願望がそれである。

後醍醐天皇を一貫して崇敬し支持してきた楠木正成は、七生報国、つまり七度生まれ替わって、国のため、天皇のために献身するという考え方を遺して、敗れると分っていた湊川の決戦（一三三六）へと赴いた。相手は足利軍であった。しかし、歴史に名が残されたのは、勝った方ではなく、敗れた方の正成であった。

前に紹介したように、吉田松陰も同じ志を懐いた。若くして刑場の露とは消えたけれども、「七度生まれ替わってでも必ず一貫して志を遂げ切る」というのであった。

現今の日本民族は、こういう高邁で、しぶとい魂を失ってはいないか。大東亜戦争の敗戦に懲りてであろうか。

もちろん、忠誠を捧げる対象は、私事や誤った改革でなく、天地の公道に沿うものでなくてはならない。しぶとい魂といっても、公益の目的を目指す魂でなくてはならない。単なる私的な「恨みつらみ」などはもっての外である。敵、敵、敵、敵を討つ、というような敵愾心でも困る。正しいいのちの役目を果たすために七生を捧げる、と考えるのである。

それぞれの民族、また幾つかの民族や人種が集まっている国民の場合には、その心の深層に、歴史の流れの中で培養されてきた集団無意識（カール・ユングの言葉）というものが存在し、そこから個性のある霊泉がこんこんと湧き出ているものである。そして事ある毎に、人々の心はそこに還っていくものであろう。

本当の魂の内容とは、そういう霊力であり、それが民族や国民の魂だ、ということができよう。国民は、国民として共同体を造り利害を共にする限り、そうした精神のレベルでの集団の深層無意識、つまり国民の

共同精神、共同の魂を欠いてはならぬ。

見逃してならぬことは、毎日使う言葉にも――国歌と国旗にも――その集団無意識としての民族・国民のいのちと魂が宿っているということである。ゆえに言葉の精華である民族の神話は尚ばねばならない。言葉は魂の担い手であり運び手なのである。

だから、祖国と恩人の言葉を粗末にし、言葉の源泉である神話・古典を蔑にする国民は、その精神が衰弱し、分裂し、堕落するに違いない。

言葉の乱れは精神の乱れの徴である。今改めて、国民の魂を表し国民の間で代々運び合う言葉――世代間のコミュニケーション――というものの大切さを、考え直してみようではないか。古い歴史と伝統を背景とするよき言葉と、よき物語を、大事にしようではないか。

その物語とは、祖国の古代におけるいのち集団の物語なのである。

この意味で、天皇の物語は、日本論の核心であるが、最近、近代日本思想研究会『天皇論を読む』（講談社現代新書）が出た。思想の訓練のために推薦したい。日本の国柄における天皇の文化的働きについては、山口昌男『天皇制の文化人類学』（岩波書店）も参照。

結局、建武の中興（新政）とは、先に述べたように、朝廷側が鎌倉幕府を倒し、新たに天皇親政の下での朝廷中心の政治体制を造ろうとした運動であった――それは、はるか後年、明治維新となり、近代という新

しい装いをもって実現した。

建武の時代には、京都にあった朝廷という皇室の貴族政府と、鎌倉にあった幕府という武家政府との、二重政府（二重政権）の時代であったが、その両者の間の分業と協業がうまくいかなくなっていたのである。こういうとき、国家改革が課題となるのである。

国家に秩序の一貫性が無くなれば、国家は混乱し、国民は苦しむ。

当時は、蒙古襲来によって武士階級の負担が増加したのに、それを補う武士への戦後の恩賞の元資が不足し、かつ配分が不公平であり、それに鎌倉幕府の執権北条得宗家をめぐる内部の腐敗と抗争も重なっていた。

同時に、政府である朝廷も、人事が、平安時代からの古い貴族の間の身分制人事に凝り固まって、実力主義を軽視していたから、後醍醐天皇を中心とする人々が、それを実力主義の人事に改めて、全国を朝廷中心に統合し直そうとしたのであった。この狙いは理にかなっていた。

幕府は地方分権、朝廷は中央集権であった。建武の国家改革とは、その中央と地方の関係の組み替えを行おうというものであった。部分と全体との構造についての改革であった。

私は、以上のような自分の見方は、後醍醐天皇とその支持者・南朝方の人々に厳しすぎるものであることは重々承知している。だが、歴史の条件の変化、特に利害の関係の変化をよく見通し、利害をうまく調整する方策を講じないと、いかに高徳の人によるものであれ、いかなる国家改革も成功しないということであ

る。建武の中興が重大な試み――実力主義に基づく国家への人材登用と、利害の地方分権に即応する制度の統合という挑戦――であったがゆえに、それを例に出して考えてみたのである。

国家改革は利害関係の組み替えを行うことであるから、関係する人々の利己心をうまく宥めて、リーダーの真の狙いへと統合する知恵と方策が求められる。惜しいかな、建武の新政には、情熱的な軍事上の忠臣はいたけれども、政治として補佐し遂行するに足る人物が、不足したのではなかったか。リーダーを補佐する忠臣がいかに不可欠であるか、ここに歴史の後知恵を学ぶべきである。

顧みて、建武以降の日本の歴史を長い目で見るとき、明治維新とは、この建武の中興が挫折した国家改革を、近代において改めて再現し、成就したものと言えるので、維新の要点は以下の如し。

①対外的な危機への対応姿勢

西洋資本主義からの侵略が迫っているときであるにもかかわらず、幸いなことに、幕府を解体して、天皇を中心に国家体制を構築していこうという国学の思想が国民世論の素地を作った。国学は、日本という国家の意識を国民に自覚させた。人はこれを皇国史観といって貶すが、この歴史観は一定の妥当性を有するものであり、批判は的外れであると考える。

しかも国学が、単なる集団意識としてのナショナリズムの自覚ではなく、また木に竹を接ぐような外来思

想の移入でもなく――猛烈な洋才の輸入は行った――まさに民族の歴史的伝統を踏まえての自覚であり、人々の集合無意識を覚醒させるものであったから、歴史の中断と国民の利害の争いという混乱を避けることができ、フランス革命後のような長期に及ぶ大混乱を生まなかった。この意味で王政復古は意味深いものであった。

②国民精神・霊力の統合と高陽

天皇を中心とする国家体制とは、国民の精神が「天皇を中心とする国民霊力の統合」として結集することを意味する。もちろんそれは、一朝にしてなるものではないが、連綿と続いた国学の下地と、外国からの脅威とが合わさった精華である。

一方では国民の心の態度を国内に向けて合致させ、他方では科学技術を進んで学び、研究し、かつそれを生んだ西洋の文明と文化を吸収するという努力を促進した。まさしく朝野こぞってそのようにしたのであった。

教育勅語、帝国憲法、軍人勅諭は、三位一体となって、内を耕し外に備えるという国民精神の在り方を方向づけたのである。

③リーダーの好判断

途中に、幕府と朝廷を統合する公武合体論などの政論の対立はあったが、最後の将軍である徳川慶喜――しかも幸運なことに尊皇の志し篤い水戸徳川家出身の大人物――が、鳥羽伏見の戦いで戦を放棄して敵前逃

亡を行い、そして時宜を得た大政奉還の決意を実行して、幕府側と朝廷側との決定的な対立を回避することができた。

西郷隆盛と勝海舟の間で江戸城の無血開城の話し合いもつき、江戸は無傷で新たな都に移行することができた。そして、維新の三傑といわれる西郷隆盛、大久保利通、木戸孝允（桂小五郎）といったそれぞれ異なる特性をそなえた人物がうまく適役を演じた。

④政治体制のバランス

明治体制は、藩に別れていた封建制を止めて郡県制というべき制度を据えたから、中央集権と地方分権という観点から見ると、両者の長所を取り入れたものであった。また、それまでの身分制を廃止して四民平等としたから、人格の平等を基にした自由と正義の原則が曲がりなりにも社会に貫徹することになった。遠く思いを馳せれば、建武における先人の理想がここにようやく実現したと言えよう。

先に述べたように、国家改革は国際関係の変化に対応するものでもなければならない。いのち集団は、変化する国際環境に適応し直さねばならないという次第である。

国家の改革の必要は、アメリカの南北戦争でリンカーンが直面したように、確かに連邦制かその分裂か、また奴隷制を巡る思想の対立など国内の要因からも起こる。

しかし、特に日本の場合には、国内要因だけで起こるのではなく、蒙古襲来のような外圧と内部の行き

詰まりとが重なったときにこそ、改革がどうしても避けられなくなるのである。日本のようないのち集団では、内と外とのバランスがいつも問われるのである。

近代日本は、欧米帝国主義による外圧の中での明治の国家改革（明治維新）、一九四五年の敗戦と連合国占領下でのマッカーサー改革を経てきた。そして、現在のグローバル市場革命の中での中国の巨大化に対応する国家改革と、いずれも外圧・環境変化への対応を迫られているわけである。

しかし、その改革が、悲しいことに、昔であれば武力抗争となり、今であれば政党間の、あるいは与党内部での派閥争いへと堕落する。そして勢力争いは、始末の悪いことにほとんどが利権と結び付いているのである。いのちは利権と結び付きやすいという宿命を孕んでいる。

国家というものは、対立する利権をどうにかして共存させる仕組みだ、という側面も無視できないのである。マックス・ウエーバー（一八六四～一九二〇）という人は、それを「利害状況」と呼んだ（大塚久雄『社会科学の方法』岩波新書）。

その時、国際関係と国民を包む利害状況とその変化を的確に掴むことが、求められるリーダーの資質なのである。朝鮮半島の諸国家は、高句麗、百済、新羅、李朝など歴代、支那の帝国に幾度も支配され、近代にはロシアに侵蝕され、遂に政権内部の混乱に乗じて日本に併合されたのであった。

国家の指導者たる者の責任は小さくない。この点、「東アジア大陸」の上での民族の興亡については、岡

田英弘『歴史とはなにか』（文春新書）を参照。いわゆる「中国」の王朝の多くがいかに漢民族でない異民族の支配者であったかが、史実として示される。

その時、利害状況を調和させるための国家改革が成功しなければ、国家社会は、応仁の乱のように動乱続きとなるほかない。さらには、国家が凋落するということになりかねない。

日本の明治維新（一八六七）とほぼ同じ時期であるが、アメリカでも南北戦争（一八六一～六五）を経験した。それは、南部農業地域――自由化論――と北部工業地域――保護主義――の利害をいかに調整し、連邦制を維持するかという戦争であったのである。

弁護士出身のリンカーンは、既に述べた通り、利害状況についての優れた調整役であった。南部は奴隷制に基づく農業地帯で、ヨーロッパ大陸への穀物の自由貿易を利とし、北部は新興の工業地帯で、保護貿易を利として対立していた。そこでリンカーンは、連邦制を存続させる人々と協力することが目的で、そのために奴隷を解放することにして、実質上は残存させる、という妥協案をとったのである。

そして、実質的な人種平等の実現という新たなる神話は、約百年後、二十世紀は六〇年代の「公民権法」（一九六三年）から登場することになる。ケネディの時代がそれであった。歴史には伏線というものがあるようである。

国家改革というようなものは、国民も指導者も、心を無にし、心を一つにしなければ、とうてい達成されないものである。「億兆心を一にして」といわれるゆえんである。

特にリーダーは、私心なく、いわゆる「丸投げ」をせず、ぶっきらぼうな表現に止まらず、忍耐強く説明を尽くす人であり、国民から支持され共有できる価値観を示し、それを身につけた人格の持ち主でなければならない。

それゆえ、歴史の新しい段階毎に、新しい価値観を体現できる新しい型のリーダーが出現しなくてはならない。

（五）歴史の因果と禍福はメビウスの輪のごとし

しかし、そのように改革を志し、上首尾をあげても、しばらくすると、また何とかしなければならないような事態がやってくる。だから、いのち集団には栄枯盛衰と改革というものが一貫して現れる、因果律というものが貫いている、ということになるのである。しかし事は、単純ではない。もう一歩、掘り下げて考えてみるべき地層が歴史には伏在しているのではないか。

すなわち、長い目で追って行くと、成功が失敗の因となり、失敗が成功の因ともなるということである。リーダーシップもこの因果の中で翻弄されかねない。

成功と失敗の因果関係には、次の組み合わせがある。

①勝つことが、勝つことの因となる。

②勝つことが、負けることの因となる。
③負けることが、勝つことの因となる。
④負けることが、負けることの因となる。

歴史における国家の対外関係についてこれを考えてみよう。

クラウゼヴィッツ（一七八〇～一八三一）は、「戦争はもう一つの形での政治である」（『戦争論』岩波文庫）と述べたことで有名であるが、日本が行ってきた対外戦争も、外国との利害関係を改革するもので、「改革」の一種であり、対外政策であった。国家改革はこの側面を無視できない。

日本による真珠湾攻撃（一九四一）に始まる大東亜戦争とその後の帰結を例として、歴史の因果律を考えてみよう。

第一に、ハワイ軍港だけに視野を絞ると、あの攻撃戦術はかなりの成功であった。――かなりの、とやや限定するのは、肝心の航空母艦を一つも攻撃せず、生き延びさせ、やがてそれらが活躍してくるからである。攻撃を考案し総責任を持って指揮した山本五十六元帥（一八八四～一九四三）は、一代の英雄であり、偉人であり、はては軍神であるということになっている。次は今なお人々に人気のある元帥の言葉である。

「やってみて、言って聞かせてさせてみて、ほめてやらねば、人は動かじ」

現在、二十一世紀初めの日本の感覚では、軍人も公務員である。しかし、公務員が英雄であり、偉人であり、軍神であるという扱いを受けるなど想像だにできない。一九四五年以前には、時代の空気が今と異なっていたのであろう。欧米でもそうだが、軍人が高く尊敬される時代があったのである。

そのような人々の意識の移り変わりということも、歴史の教訓の一つであろうか。

第二に、先にも「責任論」で触れたが、ここでは「因果論」として論じよう。一例として、一体、あの真珠湾攻撃は、大東亜・太平洋戦争の全体の勝敗という広い戦略の視野の中で考えると、美事な「失敗」であった、ということになるのではないか。

撃破すべきアメリカの空母はすべてパールハーバーから早々と避難してしまって、日本軍はいくつかの戦艦のみを攻撃したにすぎなかった。しかも、あの戦略のせいで、アメリカ国民の戦意を失わせるどころか、かえって復讐心に火をつけ、鉄の団結心を作り出し、ローズヴェルト大統領を助け、国民を動員して日本への本格的な反撃を組織させたのである。

一説によれば、日本の攻撃をローズヴェルト大統領は暗号解読によって予知していた。彼は日本を欺き、「騙し討ち」をさせた、といって批難する説もあるが、それはナンセンスである。真偽はともかく、その「騙しに乗せられる」ようでは、日本軍たるもの、なんとも情けないではないか。

なまじ、あの一九四一年の攻撃が成功したことこそが、四五年の敗戦という「失敗」をもたらすことになった初動原因なのではないか。

悲劇の英雄たる山本五十六元帥の苦衷や、推して知るべし。

もっと大きな立場からの戦略立案はありえなかったのか。やはり、あの戦略はいかんともし難い悲劇であったのか。だが、「いかんともし難い」とか、「後からは何でも言える」などといって、検討をそこで止めてはいけない。

天皇に尋ねられて、「一年半しか持ちこたえられないでしょう」というような生半可な予測のままで、国家を戦争に捧げた人たちは、どのようにして敗戦の責任をお取りになられたのか。

明治という時代の日本があれほど好きであった司馬遼太郎さんが、「昭和国家」にはほとほと愛想を尽かしていたのも、分かる気がするのである。日本は、もっと賢く振舞うことは出来なかったのか、と。（司馬遼太郎『「昭和」という国家』日本放送出版協会）

国の命運を左右する重要政策においては、「武人」気取りの決断では困るのである。昭和の軍指導者たちは、武人であるより先に、軍事・国防にかかわる職業公務員として、政策と戦略の専門家であるべきだったのではないのか。

昭和天皇は、パールハーバー攻撃の計画を裁可なさる時に、どのようにお考えであったのか。

明治維新は確かに成功劇であったが、どうも大東亜戦争は戦争としては一大失敗劇であった。まさに、対外的にも、国内的にも、あれは国家的悲劇であったのだ、と言わざるを得ない。

第三に、しかし、さらによく考えると、**悲劇にもプラスの効用があることに気づかされる。**つまり、敗戦

の結果として、次のようないくつかの好ましい状態が生まれたとも言えるからである。

①一九四五年、日本が戦いに敗れて、横暴な軍部が居なくなり、国民は解放されてホッとした。実際、終戦の頃の普通の国民に聞くと、敗れたことは残念であるけれども、一方で「やれやれ、と安心した」「解放感に浸った」という人が、圧倒的に多かったのではないか。

②国家体制が民主化され、国民の自由度が高まり、教育に、経済活動に、安んじて没頭できるようになった。「世界の奇蹟」と驚きの目で見られた日本の復興を支えたエネルギーは、そうした自由化され解き放たれた欲求から、沸いて出たものであったろう。「負けるが勝ち」ともいうではないか。

第四に、ところがもっと時代を下り、視野を広げて見ると、解放の結末として、現在の日本には、まことに困った事態が生じていると言わざるを得ない。解放の方向性に問題があった。アメリカの自由平等思想によって、伝統的な日本人の魂がガタガタにされ、全国民が、老いも若きも、自己中心、つまり若者のいう「自己中」（ジコチュー、自己中心主義者）に走ることになったのではないか。

二十世紀後半の日本は、軍備を怠り、吉田茂内閣（一九四七）以来、保守側も革新側も、挙げていわゆる「一国平和主義」に安住し、自国を守る気概を失ない、アメリカにおんぶする国に成り果てた――戦後日本の保守本流は吉田派であるが、その本質は対米協調と対米依存である。

祖国を守るために「必要なら銃を執って立ち上がる」という国民は、まことに少なくなった。多くの国民が「外国が攻めて来たら逃げればよい」という有り様となった。

自己の権利の主張ばかりで、自己責任を取らない人々が激増した。

テロ問題についても、国際協力一つできない。泥縄式に慌てて法律を整備するほかないていたらくではないか。

ベルリン大学教授として令名を馳せたウィルヘルム・ヘーゲル（一七七〇～一八三一）という哲学者のことはすでに引いたが、彼の『歴史哲学講義』という書物には、「歴史のとらえかた」として三つのものを示している。（長谷川弘訳『歴史哲学講義』岩波書店、上下巻、参照）

①事実そのままの歴史

②反省を加えた歴史

③哲学的な歴史

第一の「事実そのままの歴史」というものは、「自分たちが目の当たりにし、自分たちがその同じ精神を共有できる行為や事件や時代状況を記述し、もって外界の事実を精神の王国へとうつしかえる」ものである。

第二の「反省を加えた歴史」では、二つの類がある。まず、一民族、一国家、人類の世界史というような通史であり、「歴史家自身の精神により素材がさばかれる」ものである。次には実用的な歴史があり、後世の人々から見て「現在にも通用するなにものか」を引き出すのである。ここには、芸術の歴史、宗教の歴史、学問の歴史、政治や経済の歴史というような、個別の分野の歴史が述べられる。

第三の「哲学的な歴史」とは、「実体、無限の力、自然的生命および精神的生命」である「理性」というものが、歴史として活動し、「自然的宇宙」と、世界史たる「精神的宇宙」とに現れる、とそのように歴史をとらえるものである。

理性とは、実は神と呼んでもよい存在であり、ヘーゲル教授によって、歴史は秘かに神論と関係付けられることになり、歴史は神の心の働きを証明するものと解釈される。

「世界の歴史とは、精神が本来の自己をしだいに正確に知っていく過程を叙述するものということができる」と。

そして、精神の本質は自由であり、したがって精神の歴史たる世界史は「自由の（概念の）歴史であるという。

ここから、独特の――しかし、強度に西洋的な文化的偏見に囚われた――世界史論が強弁される。ヘーゲルの自由論はいう、「東洋人は、ひとりが自由だと知るだけであり、ギリシアとローマの世界は特定の人びとが自由だと知るのであった。だが、わたしたちのゲルマン人はすべての人間が人間それ自体として自由だ

と知っている」のである。「ひとり」とは、王や皇帝のこと、「特定の人びと」とは、奴隷を従える自由人のことである。この三区分がすなわち世界史の段階区分になるとする。

ヘーゲルのこの歴史観が、ベルリン大学でその学生であったマルクスに受け取られる。そして、ヘーゲルの思考の「逆立ち」を直されて――頭で立っているものを、足で立つようにされて――「唯物史観」へと変換されたのである。ヘーゲルが神を言い換えて「精神」としたところを、マルクスは人類による「物質的な生活手段の生産」の活動及びその能力つまり「生産力」と置き換えたわけである。

しかし、われわれは現代において、もう一度、変換を行う必要がある。つまり、生産力・創造力を、なにも生活手段の生産におけるものに限定せず、思想や哲学や芸術や情報・知識の生産まで含め、「**自然と人間の生産力・創造力**」と置き換えればよいのである。唯物史観は、さらにもう一度変換されて、自然界と人類界、及び物質と精神を総合的に表わす「**いのち史観**」とならねばならない。

結局、歴史を研究し、調べ、学ぶこととは、単に過去に起きた事実を知る、過去の人々がどう考えたかを知る、というだけに止まらず、そこから実用的な指針や教訓を引き出すことを目指すのである。ここに、因果律思考の活躍場がある。それは前にも述べたように、5W1H、つまり、

WHEN　（何時）
WHO　（誰が）
WHERE　（何処で）
WHAT　（何を）
WHY　（何故）
HOW　（如何なる方法で）

からなる記述の様式を取る。あのとき、あの人たちが、どこで、なにを、なぜ、いかなる方法で、行ったのか。

歴史では、まずこういう類いの記述を積み重ねる。

しかし、記述するのは、原因、条件（縁）、それに結果を結び付けて、出来事や行為の因果法則的な理解をより良く進めるためである。

例えば、「西南の役」をどう見るか。西郷隆盛さんは、なぜ鹿児島に帰り、人々と挙兵して明治政府軍と鉾を交え、城山に果てることになったのか。

軍旗を奪われるという屈辱を味わった乃木希典大将は、旅順の二〇三高地におけるロシア軍との攻防にも、再び思うような戦果を挙げることができなかった。しかし、その後の歴史において、乃木大将はなぜかくも崇拝されるようになったのか――もちろん、西郷さんも国民的人気がある。今日ではむしろ乃木大将より知名度は高いであろう。

九十歳以上の寿命をいただいて長寿を寿ぐ人と、三十歳足らずで時の政府によって処刑された松陰先生のような人とは、どこにその違いの原因があるのか。

戦争に負け、何ひとつ無くなった焼け跡の灰塵の中から復興を始め、高度成長を成し遂げ、一度は世界から称賛とも憧れとも妬みともつかぬ評判を獲得した日本の経済と会社が、一九九〇年代に入り、長期の不況にさいなまされることになったのは、なぜか、いかにしてか。

それに反して、中国では、経済がいま大躍進中である。毛沢東の行った過去の文化大革命は、その後、中国の人々自身から批判が強かったが、今の大躍進にとってプラスに働いたか、マイナスに働いたか。いずれであったのか。

原因を探る因果律思考は、本格的に歴史を研究する最大の動機である。

この点、注目すべき流れがあるということを付言しておきたい。それは、何々村史、何々市史というような地方史を繙くと、各地に神官と僧侶の家系が連綿として存続し、その家系が各地の生産力と文化の継承を担ってきた事例が多い。これは、注目すべき歴史の真実なのである。

現代の歴史感覚では、家系を辿ることは人間差別、階級差別につながるなどとして嫌う傾向があるが、いのちは、続くことを通じて、かつ集団的に相互作用し合うことを通じて、その生産力を存続させ発展させるのである。プツン、プツンと途切れることによって発展するのではない。継続は力なりということは歴史の真実なのである。

しかし、私は先に述べた。因果律思考は、それに囚われてはいけないものだ、と。なぜか。その理由を、

ここに纏めておきたい。

第一は、出来事や運命には、その原因が分からない部分が圧倒的に多い。

第二に、たとえ原因が分かったとしても、その原因を取り除くことができないか、原因を取り除いても、それで出来事や運命を今更、変えることができない場合が多い。

第三に、出来事や運命を改善するには、過去に生じた原因を取り除くということは必要無く、決め手は専ら「これから未来を善くする」という改善への挑戦であるという場合が多い。

第四に、出来事や運命は、一旦は好ましくないものでも、それが新たな原因となり、禍と思えたことが福を生み出すことにつながる場合も多い。

どんな出来事や運命でも、それを当人が、当の国民が、「どう受け止めるか」によって、その後の行く末が変わってくる、ということである。「あのときああしておけばよかった」と、いつまでも悔やんでも仕方がない。過去に囚われると、未来を開く元気が湧いて来ない。過去にこだわって、未来を犠牲にしてはならない。

「これからどうする」という未来志向の精神を、歴史からは掘り起こすべきである。

歴史とは、まことに、
「禍福、あざなえる縄のごとし」
「陰陽、メビウスの輪のごとし」

であるということを忘れてはなるまい。

しかもそこに、人間の力では如何ともしがたい宿命があり、しばしば「悲劇」さえ起こるのである。

結局、改革に終わりなく、安住の到達点など無きもの、と心得るべきなのだろう。「歴史の終り」（フランシス・フクヤマ）などということはあり得まい。ならば、安んじて歴史の諸行無常に徹しようではないか。

＊今回もまたコンピュータワークについて、学生の古川範和君に協力を戴いた。記して感謝する。